

令和元年6月6日現在

機関番号：34316

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16891

研究課題名(和文)実践クラスルームコミュニティにおける新人英語学習者の移行：理論と実践の統合

研究課題名(英文) A study of the transformation of novice English as a foreign language (EFL) learners in communities of practice: Theory and practice

研究代表者

長尾 明子 (Nagao, Akiko)

龍谷大学・国際学部・講師

研究者番号：60570124

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：実践共同体とは、集団メンバー間で技巧と知識の習得が可能になる環境のことである。大学生と教員で構成される、一つの英語ライティングクラスルームを実践共同体の一つとして捉えた。混合研究法を取り入れ、その実践共同体の中で、英語学習者が新人から経験ある学習者へどのように移行するかを明らかにした。

分析の結果、(1)英語の知識や技術に関する変化について、学習者のエッセー構成と言語的特徴の選択に関する気づきが見られた。(2)他メンバーとの人間関係、(3)参加度合に関する検証結果は、実践共同体を構成する「共同の事業」「相互の従事」「共有されたレパートリー」の要素が相互に伸びることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国内の英語教育やクラスルームリサーチに関する混合研究法の順次的探求デザインを取り入れた研究は限定されている。

本研究では、クラスルーム単位を一つの実践共同体として扱うことの妥当性を証明し、学習とは学習者が所属するコミュニティメンバーとのコミュニケーション、物や道具などによって構造化されたシステムとメンバー間の協調関係などの要素も学習過程に包括されていることを立証した。「英語学習環境を文脈化したクラスルーム」に関する実践共同体の定義を明らかにし、特にリメディアル学習者(正統的周辺学習紙者)の英語能力や技術、他メンバーとの人間関係やアイデンティティ構築に対する、教育支援方法を提示した。

研究成果の概要(英文)：A 'community of practice' (CoP) refers to an environment in which participants gain knowledge and skills by participating in practical activities along with other community members. This study explored how EFL learners' awareness of CoP's three dimensions; mutual engagement, joint enterprise, and shared repertoire changed during a 15-week writing course. Novice EFL learners became experienced learners as they went on to improve their essay writing skills, relationships with peers and participation in the CoP. The results confirm that joint enterprise and shared repertoire could be the core elements supporting the CoP and that novice-level EFL learners can become better L2 writers by increasing their knowledge about generic structures and certain lexicogrammatical features.

研究分野：応用言語学

キーワード：実践共同体 正統的周辺参加者 Learner development ジャンル・アプローチ クラスルームリサーチ L2 Writing

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 概要

Lave and Wenger (1991)の実践共同体の学習観モデルをフレームワークに、(1)英語学習者がどのように新人から経験者に移行するか、(2)クラスルームコミュニティの生成とその発達の活動パターンを可視化する。本研究では、15名から18名の特定数の英語学習者と1名の教員で構成されているグループ群(集団)を一つの実践共同体として扱った。この英語学習実践共同体の中で、英語学習者が新人からより経験のある学習者へ、どのように移行するかを明らかにした。混合研究法の順次的探求デザインを取り入れ、新人の英語学習者の(1)英語の知識や技術、(2)学習者と他メンバーとの関わり、(3)学習者のクラスルームコミュニティ参加度合の3点の変化を検証した。

#### (2) 実践共同体

実践共同体とは、集団メンバー間で技巧と知識の習得が可能になる環境を指す(Lave & Wenger, 1991)。知識や技術の習得は、実践共同体への「参加」により生まれるとされる。実践共同体内には、コアメンバー、アクティブメンバー、正統的周辺参加者が存在するとされる(Lave & Wenger, 1991)。集団へ参加したばかりの参加者と、集団に帰属して月日が経過した参加者を比較すると、他メンバーとの関わり、学習者自身に対する見方、集団生活の熟達度が変化するとされる。これらの新人が経験ある参加者へと移行する特徴や学習観の特徴を「正統的周辺参加」モデルと呼ぶ(Lave & Wenger, 1991)。松本(2014)は、この新人から経験者への移行について「実践共同体特有の学習方略」と称している(p. 711)。正統的周辺参加の理論とは、ある集団に初めて参加した人々が、最初は周辺の仕事を体験しながら熟達者がこなしているより重要な仕事を観察と実践することにより、徐々に「周辺の」な位置から「中心的」な役割を果たすようになることを示す(Wenger, 1998)。

Lave and Wenger (1991)の実践共同体や正統的周辺参加の理論は、近年の国外のTESOL (Teaching of English to Speakers of Other Languages: 英語教授法)、TEFL (Teaching English as a Foreign Language: 英語が母国語ではなく、一般的に使われていない国)等の研究分野において、盛んに取り入れられている(Oliver & Herrington, 2000)。しかし、国内の英語教育関連の研究においては研究数が限られている。また、実践共同体の理論の課題の一つに、Lave and Wenger (1991)は、日常生活で発生したインフォーマル集団にて新人がインタラク션을繰り返すことで経験者へ移行するとしており、本研究が取り上げる学校でのクラスルームはそうしたインフォーマルな集団と定義が異なることが指摘されている。本研究では、筆者は「15名から18名の特定数の英語学習者と1名の教員で構成され、かつ、その固定された学習者メンバーと共に毎日英語学習を行う」という文脈をもつクラスルーム単位の集団を一つの実践共同体と定義した。Lave and Wenger (1991)の実践共同体の定義をクラスルーム集団単位に当て定義を拡張することを目標とした。

### 2. 研究の目的

研究課題は以下2点である。

(1)一つの英語学習者と教員のグループ群(学習集団)<sup>1</sup>を一つの実践共同体として捉え、その集団がどのように変容(成長)するかを明らかにし、その変容に関連する機能・要素や発達活動パターンを可視化する。

(2)特定数の英語学習者と教員を構成員とする実践共同体の中で、英語学習者がどのように新人から経験ある学習者へ移行するかを明らかにする。新人の英語学習活動の変化は以下の3点を基準に検証する:(1)英語の知識や技術、(2)学習者と他メンバーとの関わり、(3)学習者の参加度合。

### 3. 研究の方法

本研究は、質的研究を重点とした混合研究法の順次的探求デザインを取り入れた。以下の2点を明らかにした。

RQ(a)英語クラスルーム実践共同体の生成、機能および要素、活動パターンの可視化

RQ(b)新人英語学習者から経験者への移行

#### (1) 研究対象者

日本の私立大学でEAP (English for Academic Purposes)英語科目を履修する1年生(履修者合計n = 216; 1セメスター18名×2グループ)が参加、2016年度から2018年度までの期間が本研究に参加した。研究参加者は、英語習熟度別に分類されたグループメンバーと共に週に7回ほど英語の授業を履修した。本研究の授業介入部分は英語ライティング授業(15回分)であった。これらの英語学習者の約90%が本研究で取り入れた英語ライティング指導法に基づいた英作文のトレーニングを過去に経験したことがないことから、本研究に参加した学習者の多くを新人(novice)であると判断した。各参加者を対象にインフォームドコンセントおよび研究目的と

<sup>1</sup> 本稿の、グループ群の定義は「15名から18名の特定数の英語学習者と1名の教員で構成され、かつ、その固定された学習者メンバーと共に毎日英語学習を行う」という文脈をもつクラスルーム単位の集団を意味する。

意義の説明が本研究より説明があり、参加者全員が研究意図を理解したうえで参加に同意した。

#### (2)本研究に取り入れた授業の内容

英語ライティング指導の一つにジャンルベースドアプローチ（以下、GBA）指導法がある。これは、クラスルームの中で、学習者はテキスト構成と適切な語彙選択の理解高めるのに効果的な指導法であるとされる(Feez & Joyce,1998; Knapp & Watkins, 2005; Martin & Rose, 2008; Rose & Martin, 2012)。申請者は「教授学習サイクル」を取り入れた GBA 準拠ライティング実践授業を、大学生英語学習者を対象に実施した。教授学習サイクルは、1.状況設定、2.手本理解、3. 共同組立、4.自力組立、5.比較のステージに分類され、明示的指導を通して学習者は英文の書き方を段階的に理解するとされる。

#### (3) 収集したデータと分析方法

収集したデータは、学習者が書いたエッセー、自己内省文、インタビュー、質問紙調査データ、授業観察である。

#### RQ(a)実践共同体の変化を検証

Ribeiro (2011)のインタビュー内容を5件法による10項目のアンケートに修正し使用した。研究期間(1セメスター)の前・中・後期の3回、質問紙調査を実施した。各グループ間や各質問項目間の相関関係を検証した。

#### RQ(b)新人から経験ある英語学習者の移行を検証

##### (1)英語の知識や技術の移行

GBA 準拠ライティング実践授業の介入を通して研究期間(1セメスター)の間に、学習者は3つのジャンルを学習しエッセーを3回記述した。例えば、1回目のエッセーはリカウントタイプ(自分の過去の出来事)、2回目は説明文タイプ(読み手に何らかの行動をとってもらうため論拠する)、3回目はディスカッションタイプ(トピックに関して賛成反対の二つの視点を書く)である。エッセーのデータ分析方法は、申請者以外の評価者が、SFL-GBA ルーブリック評価法に基づき(Pessoa, Mitchell, & Miller, 2018)、学習者が書いた事前・事後エッセーを点数化し評価した。次に、別のルーブリック評価表を使用し(Byrnes, Maxim & Norris, 2010; Kobayashi, 2017)、申請者は学習者が書いたエッセーのジャンル分析を行った。

##### (2)学習者与其他メンバーとの関わりと(3)学習者の参加度合

学習者は、(1)自身の英語能力・知識・技術、(2)実践共同体に参加する他メンバーとの関わり、および(3)参加度合いについて入学時と現在の自分を比較し、その自己内省分析を研究期間の前・中・後期の3回記述記録した。自己内省文データは、テキストマイニングと修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ分析を行った。

さらに、研究対象者から計10名(各セメスター)を選出し、研究期間前・中・後の3回半構造化インタビューを実施した。インタビューデータは、学習者から英語学習現場でのナラティブ(経験談)を引き出し、そこから学習者の言語や学習、実践共同体に関する価値観を読み解く「ナラティブ分析」を用いた。

## 4. 研究成果

RQ(a)「英語学習クラスルーム実践共同体」の生成・機能および要素・活動パターンの変化に関して、Wenger's (1998)の実践共同体を構成する3つの相互的要素である「共同の事業」「相互の従事」「共有されたレパートリー」に関するアンケートデータ10項目(5件法)のデータを15週間の前・中・後の3回収集した。分析結果から、実践共同体の「共同事業: 実践共同体の中で、参加者の相互の協働によって維持構築される活動をしめず(松本, 2017, p. 357)」に関する要素を中心とし、英語ライティングクラスコミュニティー(学習集団)が発達している傾向が見られた。さらに、英語テストの得点が高いグループと低いグループを比較すると、低いグループの方が実践共同体の「共同の事業」と「共有されたレパートリー: 実践共同体の中で使用される、ルーティン・言葉・道具・規則・手続き方法・象徴・ジャンル・行為・概念を含む(松本, 2017, p. 357)」の項目の伸びが大きいことが判った(Nagao, 2018b)。

理論に関する貢献について、本研究の結果からは、一つの英語学習のクラスを一つの実践共同体として扱うことは概ね可能であることが判った。さらに、実践共同体の特徴(要素)である、分散認知の拡張、共通目標の存在、多様な記号的資源を自分達のものにして社会活動に参加する時に適切に使用できる能力、共通道具の認識と理解、実践共同体の中で使用される専門用語の理解と使用頻度などの縦断的な変容については、Ribeiro (2011)に使用されたアプローチを本研究に取り入れることで、英語学習を文脈とする実践共同体の生成とその発達の変容を確認することができた。

次に、RQ(b)新人から経験ある英語学習者の移行を検証、特に(1)英語の知識や技術の移行の

分析結果を記述する。英語学習者が記述したエッセー分析結果から、ディスカッションタイプのエッセーの第二パラグラフと第三パラグラフの構成に関する理解が高まっただけではなく、目標ジャンルテキストに適している語彙や表現を選択する意識が高まった (Nagao, 2018a)。エッセーに使用されている言語的特徴の理解のなかでも、「筆者の主張の強弱をコントロールするモダリティーに関連した語彙 (助動詞や *ly* 副詞) の選択」の伸びが明らかになった。しかし、英語ライティングの知識や技術の変化を適切に測定することに関して課題が残った。そのため、今後は、GBA 準拠ライティング教授法の発展および英語学習者のライティング能力の変化に関する検証研究を今後行う予定である。

(2) 学習者とはメンバーとの関わりと(3)学習者の参加度合の移行を検証するために、学習に関する自己内省文、インタビュー、授業観察データを分析した。学習者の自己内省文分析結果は、研究期間後期になると、「学習者自身の語学能力に関する成長」と「学習者が所属する実践共同体メンバーとの関わり」を関連させた内省文を記述していた。学習者が実践共同体の中で自身からほかメンバーに対して、どのような貢献や協力ができたかについての振り返りがみられた。学習者自身の言語能力に関する自己内省文においては、自身の学習方法や苦手意識について明確に記述するだけでなく、学習者の一部はこれらの問題点や苦手意識をどのように改善するか、または今後の言語学習方法について記述していた。

さらに、英語学習者が、初めて参加した学習コミュニティ(実践共同体)内でどのようにふるまい、新環境へ適応しようとしたかの姿を記録し特定の実践共同体内で必要であった社会的実践や記号的資源を明確化するために、特定の学習者のインタビューデータ分析を行った。分析結果は、高校までの英語学習体験とは異なる大学での英語学習環境を文脈としたクラスルームに初めて参加した学習者が、研究期間初期は、実践共同体内の他メンバーとはインタラクションを躊躇していたが他メンバーとのインタラクションを通して技術・知識、他メンバーとの関わり・自身のアイデンティティーの変化を達成するためや、意味生成のために必要な社会的記号・記号論的資源を使い、学習者自身の英語学習のモチベーションを継続に維持したことが判った。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

Nagao, A., Can the EFL Classroom Be Considered a Community of Practice?: Research Teaching and Writing, *IAFOR Journal of Language Learning*, 査読有, 4(1), 2019, pp. 93-108, <https://doi.org/10.22492/ijll.4.1.06>

Nagao, A., A Genre-Based Approach to Writing Instruction in EFL Classroom Contexts, *English Language Teaching*, 査読有, 11(5), 2018a, pp. 130-147, DOI:10.5539/elt.v11n5p130

Nagao, A., The Importance of CoP in Transforming New Learning Communities into Experienced Ones in EFL Classrooms, *IAFOR Journal of Language Learning*, 査読有, 3(2), 2018b, pp. 61-82, <https://doi.org/10.22492/ijll.3.2.03>

Nagao, A., Longitudinal Study of EFL Students Using the Systemic Functional Linguistics Method, *International Education Studies*, 査読有, 10(11), 2017, pp. 47-62, DOI:10.5539/ies.v10n11p47

〔学会発表〕(計 13 件)

Nagao, A., An SFL-oriented approach for evaluating Japanese ESL undergraduate students' genre-based academic essay, 54th RELC International Conference and 5th Asia-Pacific LSP and Professional Communication Association Conference, 2019.

Nagao, A., Changes in learners' awareness of language features through a genre-based approach to teaching writing, The 15th Annual CamTESOL Conference on English language teaching, 2019.

Nagao, A., Text-Based Research and Teaching in EFL Contexts: Introducing Systemic Functional Linguistics (SFL) genre-based pedagogy to Japanese EFL writing classes, The Japan Association for Language Teaching (JALT) 2018 International conference, 2018.

Kamijo, T., Nishijo, M., & Nagao, A., International Trends in ESP/EAP Research and the Application of Qualitative Research Methods: Case Studies of Academic Literacies and Genre-based Approach (Colloquium), JACET Kansai Chapter 2018 Conference, 2018.

Nagao, A., Introducing genre-based pedagogy to Japanese EFL writing classes, ASFLA Conference, 2018.

Nagao, A., The Development of Communities of Practice Indicators Within EFL Classrooms, The IAFOR International Conference on Education – Hawaii 2018, 2018.

Nagao, A., Development of EFL Communities of Practice, 43rd Annual International Conference on Language Teaching and Learning, The Roundtable Exchange, 2017.

Nagao, A., From novice to experienced in the classroom communities of practice: systemic functional linguistics, The European Second Language Association 2017 (EuroSLA 2107), 2017.

長尾明子・西条正樹・上條武 「大学英語クラスにおける授業研究のアプローチとは: 社会文化理論による研究ケースと考察」, 2017 年度大学英語教育学会 (JACET) 関西支部春季大会 < Colloquium >, 2017.

上條武・長尾明子・西条正樹 「社会文化理論による Communities of Practice とは: ジャンル  
アプローチとL2 ストラテジーの実践研究 (シンポジウム)」, 言語教育エキスポ 2017, 2017.  
Nagao, A., Self-reflection on Peer Essay Analysis in an EFL Community of Practice, 2016  
KOTESOL International Conference, 2016.  
Nagao, A., An EFL Classroom as a Community of Practice: The marriage between theory and  
practice, 26th Annual Conference of The European Second Language Association, 2016  
Nagao, A., Creating a Classroom as an EFL Community of Practice: Genre-based Approach of  
Language Learning, 6th International Conference on Foreign Language Teaching and Applied  
Linguistics and International Forum on Sociolinguistics, 2016.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年:  
国内外の別:

○取得状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

SFL 勉強会・研究会 <https://nagao25.wixsite.com/sflgroup>

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

### (2)研究協力者

研究協力者氏名: ピーター ミカン

ローマ字氏名: (MICKAN, Peter)

研究協力者氏名: 上條 武

ローマ字氏名: (KAMIJO, Takeshi)

研究協力者氏名: 西条 正樹

ローマ字氏名: (NISHIJO, Masaki)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する

見解や責任は、研究者個人に帰属されます。